

乳児における協和・不協和音による社会的関係性の推測

伊藤 真央

音楽は多くの文化圏において集団で演奏されることから、音楽と社会性との関連を調べた研究が数多くなされている。成人と同様、幼児においても他者との音楽行為が相手に対する向社会的行動を促進することが示されている (Kirschner & Tomasello, 2010; Good & Russo, 2016)。合唱や合奏など、他者で行う音楽行為に共通するのは、相手と動きを同期させるという点である。このような音楽における動きの同期性は、他者への共感や好感を高める要因の一つであると考えられている (Trehub, 2003)。また、同期性の他に、音楽の要素の一つとして協和性が挙げられる。音楽の協和性は、異なる周波数の音を同時に聞いた時、聴取者にとって心地良く感じられるかどうかで定義される (Zentner & Kagan, 1998)。成人だけでなく乳児も協和音と不協和音を識別でき (Trainor & Heinmiller, 1998)、不協和音を聴くと不快感を示す (Zentner & Kagan, 1998; Zentner & Eerola, 2010)。これらのことから、乳児にとっても協和音・不協和音の弁別は可能であり、それぞれ快・不快な刺激であると言える。

乳児は他者の行為や特徴を手がかりに他者を評価できるだけでなく、第三者の視点で他者の関係性を推測することができる。その手がかりになるものとして、動きの同期性が挙げられる (Fawcett & Tunçgenç, 2017)。このような同期性は他者との音楽行為においても見られるものであるが、協和性をはじめとした音楽の他の要素に関しては、関係性推測の手がかりになるかどうか、検討されていない。そこで本研究では音楽の一側面である協和性に着目し、他者の関係性推測という観点から、音楽の協和性と乳幼児の社会性の関連を検討した。

対象児は、14, 15 ヶ月児 16 名であった。児に協和音もしくは不協和音を演奏するぬいぐるみペアの動画を提示した後、それぞれのペアが仲が良さそうに振る舞う動画を見せた。どちらのペアを親密性が高いと判断したか、期待違反法により調査した。もし児が協和音を演奏するペアをより親密性が高いと推測するならば、不協和音を演奏するペアが仲が良さそうに振る舞った時に、期待違反を検出して画面を見る時間が長くなるという仮説を立てた。また、大学生 39 名を対象に刺激の評定を実施した。各条件の刺激の音源がそれぞれ協和音、不協和音と判断されるか、また成人が他者の関係性を推測する際、音楽の協和性を手がかりにするかを調べるのが目的であった。

成人評定の結果、本研究で用いた協和条件・不協和条件の刺激は、それぞれ「協和音」「不協和音」であると評価された。また、成人は両条件の刺激を視聴したうえで、協和条件のぬいぐるみペアの方が不協和条件のペアよりも仲良しであると判断した。児のテスト動画に対する注視時間を分析した結果、各条件間でテスト動画の注視時間に有意差は見られなかった。したがって、14, 15 ヶ月児は不協和音を演奏するペアより協和音を演奏するペアをより仲良しであると推測するという仮説は支持されなかった。

仮説が支持されなかった理由として、児が協和音・不協和音を弁別できていなかった可能性と、児が音楽に触れた経験が少なかったため、他者の関係性推測の手がかりにできなかった可能性が挙げられる。本研究では児を対象とした刺激の協和性評定を実施できなかったため、今後の研究では対象月齢児に対して刺激映像の妥当性を検証する必要がある。また、本研究では児の音楽経験を尋ねなかったため、参加児の養育者に対して、児のこれまでの音楽経験や、日常的に音楽に触れるかどうかなどといった調査をする必要がある。(比較発達心理学)